

古墳時代の馬と矢(柳瀬古墳群1号墳出土鉄製品(町指定文化財))

社会教育担当 望月 暁

柳瀬古墳群の発掘調査

柳瀬古墳群は大字皆野字柳瀬にあり、もともとは3基あったといわれます。平成3年、個人住宅建設のために1号墳の発掘調査が実施され、石室内から鉄製の馬具、胡ろく、鉄鎌などがまとまって出土しました。いずれも古墳時代終末期(7世紀頃)の様子を知るための貴重な遺物であったことから、町指定文化財に指定されています。今回は、馬具と胡ろくについて見ていきたいと思います。

古墳時代の馬と馬具

馬が日本に伝わったのは古墳時代前期(4世紀頃)といわれますが、当時の馬は誰もが乗れるものではありませんでした。それは、古墳以外から馬に関する遺物があまり発見されないことから分かります。また、古墳から出土する

馬具には、彫金や鍛金など、当時の最先端技術が投入されており、当時の馬はさまざまな装飾品で彩られていました(図1)。

柳瀬1号墳から出土した馬具は轡に関するものです(写真1・2)。轡は馬の口に装着され、乗り手が持つ手綱と連結する重要な部位です。馬の口の中に取り付けられるはみ、手綱と結ばれる引手、そして両者をつなぐ鏡板から構成されます(写真3)。

このうち鏡板は、装飾が施されやすい部位の一つなのですが、柳瀬1号墳の鏡板は、鉄製でシンプルなつくりとなっています。

矢を入れる道具

馬具と並び、柳瀬1号墳から出土した遺物に胡ろくがあります。これは矢を入れる道具です。弓道で使う矢筒を思い浮かべますが、これは鞞の流れをくむものです。古墳時代には、鞞と胡ろく、2つの道具があったわけでは

ありません。鞞は背中に背負って使うもので、矢の先端を上にした状態で納めます。一方の胡ろくは浅い箱形をしており、腰か

ら下げて使用します。鞞とは逆に、矢の先端を下にして納めます。

古墳からは鞞と胡ろくを模った埴輪が発見されていますが、そのほとんどは鞞です。死者を邪から護る象徴的な道具だったのでしょう。一方の胡ろくは、奈良時代以降に「やなぐい」として広まります。

胡ろくを腰から吊るして使ったことはすでに述べましたが、これは大きく腰回りにつける帯部、矢を入れる本体である袋部、袋部と帯部をつなぐ吊り手から構成されます。鉤のような形をした柳瀬1号墳の遺物(写真4)は、袋部の縁に取り付けられた飾り金具であったと考えられます。X線による観察で、鋌に銀を張っていたこと、裏面に絹と木材が付着していたことが分かっています。ここから、袋部は木製で、その上から絹をかぶせていたと推察されます。

柳瀬1号墳の遺物を見よう

柳瀬1号墳から出土した馬具と胡ろくは、いずれも装飾が抑えられ、実用的な道具になっているのが特徴です。これは、古墳時代後期から終末

期(7世紀以降)の古墳から出土した副葬品の一般的な傾向でもあります。

一方で、柳瀬1号墳からは、金崎古墳群や稻荷塚古墳(国神)から発見された鉄剣は見つかっていません。これら古墳の性格の違いについて、今後調べていくことが大事です。※役場ロビーで、今回取り上げた柳瀬1号墳出土鉄製品を公開します。ぜひご覧ください。

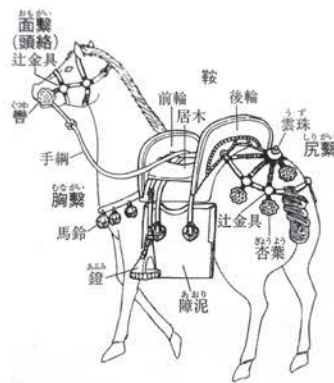


図1 古墳時代の馬具

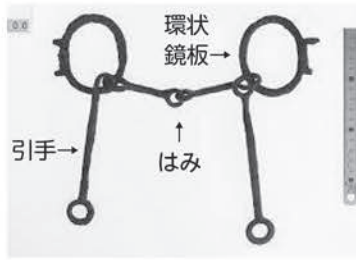


写真3 古墳時代の馬具(轡) 県主塚古墳出土(長野市提供)



写真4 柳瀬1号墳出土胡ろく(飾り金具)



写真2 柳瀬1号墳出土馬具(はみもしくは引手)



写真1 柳瀬1号墳出土馬具(環状鏡板)